目　次

序

第一部『コリャード 懺悔録』

第１章　原著（ローマ，1632 年刊。天理大学附属天理図書館所蔵）原色影印
第２章　解題　―コリャード略伝，『懺悔録』研究小史，原著概要，原著の構成に関する若干の疑問，等―
第３章　翻刻および翻字（原著ラテン文字の和文翻刻と漢字仮名交じり文への翻字）附，現代和語訳
第４章　日本語補注
　第１節　信仰宣言文に見える「御大切」という語彙をめぐって
　第２節　第一誡「御一体のデウスを敬ひ，貴み奉るべし」をめぐるもろもろの告解に対する日本語補説
　第３節　第五誡「人を殺すべからず」をめぐるもろもろの告解に対する日本語補説
　第４節　第六誡「邪淫を犯すべからず」をめぐるもろもろの告解に対する日本語補説
第５章　ポルトガル語全訳注（附，コリャードによるラテン語訳テキスト翻刻）

第二部 特論および附録

特論１　キリシタンと統一権力〔ポルトガル語訳 / 日本語原文〕
　訳者解題／ポルトガル語訳／日本語原文
特論２　キリシタン布教における“適応”〔ポルトガル語訳 / 日本語原文〕
　訳者解題／ポルトガル語訳／日本語原文
特論３　16・17 世紀極東におけるイエズス会士の経済活動とキリスト教経済思想
　―とくにウスラの問題をめぐって―〔ポルトガル語訳 / 日本語原文〕
　訳者解題／ポルトガル語訳／日本語原文
附録１　日本イエズス会版『サルヴァトルムンヂ』（1598 年）関連箇所のポルトガル語抄訳
　―モーセの十誡ならびに七大罪に関して司祭が信徒へ行なうべき全尋問―
附録２　1990 年に採択された「ポルトガル語正字法協定」（新正字法）の概要，
　ならびにそれに対する若干の異見

引用参考文献一覧
索　　引

著者：日埜 博司（ひの ひろし）

1955 年兵庫県生まれ。流通経済大学教授（ポルトガル文献学）。上智大学でポルトガル語を，京都外国語大学大学院とフルミネンセ連邦大学（リオデジャネイロ州ニテロイ市）文藝研究院（Instituto de Letras, Universidade Federal Fluminense, Niterói, RJ）で欧亜交渉史・ポルトガル文献学を，それぞれ学ぶ。

【主な著訳書】
「ポルトガルの海外発展」（松田毅一 / 坂本満編『近世風俗図譜 13 南蛮』小学館，1984 年），ジョアン・ロドリゲス『日本小文典――附，アジューダ文庫蔵，1620 年マカオ刊本影印』（新人物往来社，1993 年），ガスパール・ダ・クルス『中国誌――附，コインブラ大学総合図書館蔵，1569-70 年エヴォラ刊本影印』（新人物往来社，1996 年）他多数

申込書	日埜博司編著・八木書店刊　2016 年 7 月下旬刊行予定 コリャード 懺悔録（さんげろく）　〔　　〕冊 ISBN978-4-8406-2214-1 C3016 ¥25000E　定価（本体 25,000 円＋税）		取扱店（番線印）
	お名前（ふりがな）	TEL	
	ご住所　〒	FAX	
		E-MAIL	

2016.6 PP 9000

17 世紀初頭日本人の心情と風俗を、名もなきキリシタンの赤裸々な懺悔（告解）が暴き出す。類例なき稀有の典籍！

コリャード 懺悔録（さんげろく）

―キリシタン時代日本人信徒の肉声―

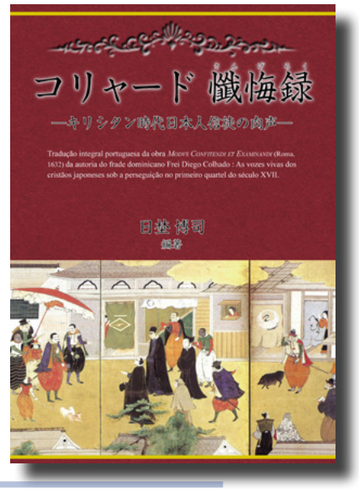
日埜博司 編著
（流通経済大学教授・ポルトガル文献学）

予約募集！

2016 年 7 月下旬刊行予定！　定価（本体 25,000 円＋税）
B5 判・上製・カバー装・730 頁　ISBN978-4-8406-2214-1 C3016 ¥25000E

【本書の特長】

- ●イスパニア人ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリャードがラテン文字の日本語で編んだ『懺悔録』（ローマ，1632 年刊）をあらゆる角度から読み解く**決定版**。
- ●コリャードが聴取した日本人信徒の告解のかずかずは，17 世紀初頭の**日本人の心性と、社会・風俗・習慣を図らずも明らかに**する。
- ●ポルトガル語式のラテン文字で再現された信徒の肉声は，**日本語史研究の貴重資料**に。
- ●天理大学附属天理図書館所蔵本の**全 66 ページをカラー版で精緻に影印**し収録。
- ●**全文を翻刻・翻字・現代語訳**し，語句には**詳細な註**を付す。
- ●「御大切」など，**特定の語彙には詳細な補説**を収録。
- ●『懺悔録』を読解するための**解題・索引・参考文献**を網羅。
- ●『懺悔録』本文，および関連する**『サルヴァトルムンヂ』**を**ポルトガル語で訳註**し，諸外国での研究に供する。
- ●特論として，キリシタン史研究の泰斗・**高瀬弘一郎の論考**から『懺悔録』の内容に関係の深い３点「キリシタンと統一権力」「キリシタン布教における“適応”」「16・17 世紀極東におけるイエズス会士の経済活動とキリスト教経済思想」を選び，**葡・日両言語で紹介**。



八木書店　〒 101-0052　東京都千代田区神田小川町 3-8
Tel:03-3291-2961 ／ Fax:03-3291-6300　pub@books-yagi.co.jp　https://catalogue.books-yagi.co.jp/

すいせんの言葉

他言無用の告白からキリシタン信徒の苦悩を知る

慶應大学名誉教授　高瀬　弘一郎

コリャード三部作のうち最重要の書籍

本書はキリシタン時代に日本で布教をしたドミニコ会宣教師コリャードが作成した書籍『日本の言葉にようコンヒサン……』（ローマ，1632 年）――通常『懺悔録』という表題で知られる――を取り上げ，日埜氏が極めて卓越したポルトガル語学の学識を縦横に駆使することによって為し得た，高水準の研究成果であり労作である。

コリャードは同じく 1632 年にローマで，『日本文典』および『羅西日辞書』を刊行している。本『懺悔録』と併せていわば三部作であるが，本書が最も重要な書籍である。1632 年といえば，わが国はすでに鎖国体制に入りつつある。そのような時にドミニコ会士が日本布教に備えたこのような書籍を出版していたことが，先ずもって驚きである。

他言無用の告白を筆録・出版

『懺悔録』は，『日本文典』の応用篇として作成されたものである。それも単に文法の応用として作った日本文ではなく，いずれ日本において司祭として，告解の場で，信徒との間で突き詰めたやり取りせねばならないであろう対話を想定した文章を掲げている。相対する信徒がどこまでキリスト教教義を理解しているか，そして十戒に照らしていかなる罪を犯したか，いかに悔い改めさせるか。

告解（告白）を聴くのは，カトリック司祭（神父）の重要な任務の一つである。信徒が罪となる行為を犯してしまった場合，告解所で司祭にそれを正直に告げる。司祭はその告白を聴いて悔い改めさせた上で，神に代わってその罪を赦す。人である司祭が神に代わって他人の罪を聴き，それを赦すとは，考えれば慄然とするようなことであるが，これこそカトリックの重要な特色の一つといってよいであろう。

司祭がその聴取した罪の話を他人へ明かすなど，もちろん許されるはずもない。しかし『懺悔録』は現に刊行され，事も有ろうにそれが行なわれている。そこに収載されている信徒の告白は，フィクションとも思われず，固有名詞こそ記されていないが，その多くは実際の告白が基になっているのであろう。読む者は，キリシタン時代にあって，司祭と信徒の間の真摯な対話の現場に居合わせているが如き緊迫感を覚える。読み方によっては，他人の犯した罪深い行為を覗き見るが如き卑俗な興味すら催す。

司祭がこのような書籍を出版したのも，日本文法の応用として，実践的な日本語文章を提示する意図からであったと思えば納得がいく。司祭にとって告解の聴取は重要な任務であるが，外国人神父にとって日本人信徒の告白を聴き取るのは決して容易な勤めではない。今日われわれが『懺悔録』を読むとき，この日本語を理解せねばならなかった外国人司祭の難儀はいかばかりであったかと思う。

日本人司祭がその役を担うことも当然考えられるが，日本人がコレジオでラテン語によって所定の学問を修得してその資格を得て司祭になるのは，これまた容易ではない。その人数はごく僅かにすぎず，キリシタン教会において日本人司祭が果たした役割は極めて限定的である。

ポルトガル語訳で海外研究者へ発信

コリャードの書籍は，神父と信徒が語った言葉――多くは信徒の言葉――の日本語のままのラテン文字による表記，およびそのラテン語訳文からなる。日埜氏の著書は，その日本文テキストを整えて漢字仮名交じり文に翻字，それを現代語に直し，そして全文をポルトガル語に訳し，註を付したものである。そのすべてが学界・読書界にとって極めて有意義なものであるが，最も特筆すべき点は，『懺悔録』全文が日埜氏によって初めてポルトガル語に訳されたことである。

当時の日本社会に生きたキリシタン信徒が，伝来のカトリックに入信し，異なるその宗教倫理に直面する，そうした彼らの苦悩がそれぞれの語り口で披瀝される本書は，われわれ日本人に尽きせぬ興味を呼び起こすが，それが極力忠実にポルトガル語へ訳されている。独りポルトガル人だけではない，ポルトガル語を介し，日本語原文には近づき難い海外の多くの研究者・読者が本書に触れることが出来るその意義は，洵に計り知れないものがあると確信する。

【刊行の意義（訳者）】

16 世紀以降，アフリカ，アジアおよびラテンアメリカの各地にカトリック布教を行なった南欧人宣教師は，それぞれ布教先の言語を用いて，一般信徒のため，ドチリイナ（教理書）や，彼らの告解を聴取するための司祭用マニュアルを編む。こうした文献の普遍性とは対照的に，外部へ漏らすことが厳禁であった信徒の告解を，その生々しい肉声のまま筆録した点において，『コリャード 懺悔録』は世界に類書をまったく見ることができず，その稀少価値は極めて高い。『懺悔録』はまた，キリシタン時代，新しく受容したカトリック倫理と，日本在来の伝統なり道徳のはざまにあって葛藤する日本人の心性を知るための良質の史料であるばかりでなく，16 世紀末から 17 世紀初めの日本語（特に西九州を中心とする西日本のそれ）や，同時代における日本の社会・風俗・習慣を知るための貴重な証言の宝庫である。上記のような価値を有する本書を，訳者が専門とするポルトガル語を通じ，広く欧米の読書人および研究者へ提供することができれば大変嬉しい。